

俳人協会會報

1965年
7月
No. 12

第四回全国俳句大会

応募九千六百余句に及ぶ

協会主催、朝日新聞社後援の恒例の全国俳句大会は、五月三十日〇時半から、東京の有楽町、朝日新聞社朝日講堂で行われた。

本年は、三月末で締切られた応募作品が九千六百余句という、最高数に達し、前景気が華やかであったが、大会当日も、折からの異常気象の影響を受けた走り梅雨の悪天候であったにもかかわらず、五百名の参加者があって、列席者に配る選句集が不足したような次第であった。

大会は定刻、岸風三樓氏の開会の辞で始まり、藤田湘子氏の司会で会が進められた。まず、水原会長は例年のおお、本日の講演者の紹介を兼ねて別項のようにあいさつしたが、素材について前以て準備しておかなければ、深味のある吟行俳句はできない、旨を強調した。ついで、秋元不死男幹事から、応募作品の詮衡経過報告(別項)があったが、九千余句の

整理に当った事務当局、徹宵して予選に当られた十人の在都選者、予選に選ばれた千余句から23句を選んだ各選者の方々の努力が偲ばれたが、来年はもっと多くの応募を待つ、とのことであった。

講演の、大野林火氏は「高浜虚子」と題して、虚子翁の七十年に近い俳句生活を時代別に概観したのち、昭和19年9月から、22年12月に至る小諸疎開時代に焦点を絞って、「小諸雑記」から日常生活を説いて、浅間かけて虹のたちたる君知るやVに始まり、虹の橋渡り遊ぶも意のままにVで終る森田愛子との虹物語を詳細に解説して、さらに、△山国の蝶を荒しと思はずやV、△敵といふもの今は無し秋の月Vを引用して、翁の自恃の精神を強調して、虚子の句史に「小諸時代」を置くべきことを提言した。

小林秀雄氏は「文芸雑感」と題して、氏が身をもって感じとった文芸観を淡々と語り、満場の聴衆に深い感銘を与え

た。要旨は別載されるが、梅原竜三郎氏が「富士」を書くのに、毎日早朝に起きるの苦心も、所詮は富士が「好き」だからで、「好き」が努力の原動力となり、観察をこまかくするもので、新奇を追うのは「好き」ではなく刺激を求めるに過ぎない、と説くあたりに氏の真骨頂がみられた。

両氏の講演終了後、入選作品の講評が皆吉爽雨、平畑静塔、山口青郎、福田蓼汀、富安風生、水原秋桜子の六選者(発言順)によって行われた。おのおのの特選句について五分ぐらいの短評であったが、「字余りを避けたい」という秋桜子氏、「わかりやすい」という方針で採るといふ風生氏、「古い季題を白眼視せずに残したい」とする蓼汀氏、その他要を得た講評であった。

なお、出席選者のうち、大野林火、石川桂郎、香西照雄、石塚友二、安住敦、秋元不死男、角川源義、岸風三樓の諸氏の講評は省略された。

最後に賞品授与式に移り、朝日新聞社賞の長田等氏、全国俳句大会賞の池上樵人、公平直哉、川本けいし、植松一露の諸氏に対して、水原会長から賞状と賞品が渡されて、石川桂郎氏の開会の辞で、

盛會裡に午後四時半、会を閉じた。
なお、大会の模様は翌日の朝日新聞に報道されたが、朝日ではそのあと「人」欄に朝日賞を得た長田氏の横顔を紹介したほか、水原秋桜子氏が六月十一日の朝日の学芸欄で、受賞作を主として表現の面から、その長所短所を批評した。今後の投句者の参考になると思うので一読されたい。なお、前後したが、大会終了後五時から有楽町の富士アイスで、受賞者の五氏を囲んで、選者、大会役員が夕食を共にして、受賞を祝いかつ激励した。尊父、夫人を伴って、上都した長田氏や、盲目のため附添いを伴って長野より来られた植松氏の喜びの姿が印象的であった。(庄中健吉記)



壇上の選者諸氏

会長挨拶(要旨)

水原秋桜子

今日は「走り梅雨」になりましたが、大勢の方に参会していただき、いい大会になったと喜んでいきます。これは一つには小林秀雄氏の講演があるためだと思えます。小林氏の書かれた論文とか感想をお読みになった方は多いと思いますが、氏の評論は、一見俳句に直接関係がないように見えて、実は勉強になる点もずいぶんあると思います。一例をあげると、大和の飛鳥路の岡寺から出て、多武峰へ行く道の左側に、「石舞台」という大きな古墳があります。これは非常に大きな石を積んだものですが、俳人がこれを詠みはじめたのは昭和十年ぐらいからだと思えます。こういうものはそれまでの俳人が手がけなかったもので、これを手がけたことだけでも、昭和俳壇の一収穫だと思えます。しかし、この頃の「石舞台」の句をみると、誰も同じことを平凡に詠んでいます。小林氏が十年ほど前に書かれた「蘇我馬子の墓」という感想文があります。

こういう文章を読むと、石舞台をただの風景の一つとして詠んではいけない、もっと深い句が作れねばならないという気持ちになります。つまりああいう文章を読むと、我々の句作が平凡にならないようにするためのものが見方や考え方を教えられるのです。我々の句作は、平らな坂を上ってゆくようにだんだん進歩してゆくのではなくて、平坦な所を歩いていて、急に崖が眼前にそびえたつ、それをよじ登ってゆくと、また平坦な道が開けてくるといった進み方をします。実際について言いますと、優れた画家の展覧会を見て、これは大変だ、世の中にはこういう芸術がある。自分もこうしてはいられないのだからという気持ちがはげしく湧きあがった時が、崖をよじ登ると同じような時と同じです。崖をよじ登ると同じように我々もその画家と同じような高さに達しようとするのです。今日の小林氏の講演は、絵のことではなく、文芸のことですから、我々俳人にこれは大変だ、こうしてはいられないという衝撃を一層強く与えると思います。御静聴をお願いします。また、その前におこなわれる大野林火氏の講演も、氏が永年苦心研究したテーマです。これも皆様に強い刺激を与えたいと思います。あわせて御静聴をお願いします。以上をもって挨拶にかえします。

選考経過報告(要旨)

秋元不死男

選考経過の報告を中心に一言ご挨拶申

しあげます。

今回の第四回全国俳句大会に寄せられた投句は九千余句の多きに達しました。これは今までの大会で最高の投句数でありました。それを全選者(二十二名)に依り第一次選考を行うことに決めたのが四月十日であります。その四月十日から翌日にかけて全投句につき、出席選者が一句のこらず目を通し選考いたしました。当日、選に当たった氏名を申しあげますと、中村草田男・福田蓼汀・角川源義・皆吉爽雨・香西照雄・石塚友二・石川桂郎・岸風三樓・安住教・秋元不死男の十名で他の選者は当日病気のため、或はよんどころのない用事があって欠席、第二次選考に当たってしまいました。

第一次選考によって凡そ千余句が予選通過作品と決定いたしました。その作品は、お手元に差しあげた選集に収録してございます。この第一次選考通過作品を改めて全選者(二十二名)に廻附しまして、入選二十句、特選三句を標準に選考を依頼、それによって受賞者を決定いたしました。その結果は、やはりお手元の選集に明らかであります。

受賞の標準は、最高点を得た作に朝日新聞社賞を贈り、特選・入選を勘考して朝日新聞社賞に次ぐ高四位までに当協会から全国俳句大会賞(俳人協会賞)を贈ることに決定いたしました。この成績はこれもお手元の選集に発表してある通りであります。

尚、選者の内、石田波郷氏が急病で入院されたため選が出来ませんでしたことまた高浜年尾氏の選には同氏の希望によ

第一次選考スナップ



り特選を設けなかったことを、ご報告いたします。最後に当協会主催のこの全国大会は、朝日新聞社の後援により、毎年五月に開催しております。来年もこの時期に開催いたす予定になっておりますので、その節はまた奮ってご応募下さいませよう、締切は三月末日を予定しております。ご記憶いただければ幸甚であります。これもちまして本大会の選考から受賞決定までの経過を申し述べさせていただきます。

(追記)次点は島野光生氏でした。島野氏に続く方々は次の通り。小谷舜花、岩崎江秋、清水徹亮、荻原光嶺、宇治春壺、土生晁帝、内山せつ子、高杉悟泉、堀田春子、渡辺志水、村上壮城(以上十一人)

高浜虚子

大野 林 火

今年四月八日が虚子先生の七回忌になるので、先生のお話をするのも何かの因縁と思います。先生は、明治七年二月二十二日、松山に生れ、昭和三十四年四月八日、鎌倉で八十六歳で亡くなった。郷党の先輩子規との交遊は、明治二十四年五月、十八歳の時にはじまり、その縁で俳句に親しみました。明治の末四年ほど俳句を離れ小説を書いておられるが、その間六十八年間、小説の四年を引いても作句六十四年になります。従ってこの間作句数は大変な数字で、清崎敏郎氏は約四万八千といっています。

虚子の長い人生にもいろいろのヤマがあります。それを申すと、明治二十八年十二月、上野道灌山で子規と俳句後継者のことで会見したこと。次は子規没後、碧梧桐と同人作の「温泉百句」（明治三十六年九月ホトトギス）で論争したこと。碧梧桐は印象明瞭の写実、虚子は調和ある理想美を俳句に求めて対立したこと。次は余俗派文学樹立の小説時代。次は大正二年の俳壇復帰。有名な「春風や闘志いだきて丘に立つ」はこの時の作。大正八年頃から虚子によって写生という言葉が多く言われるようになる。それが実ったのが昭和二年の花鳥諷詠提唱で、これ

は秋桜子、誓子、素十、青敵の輩出の時代でもあり、おそらく虚子一生のもっとも華やかなときでありましょう。

そして、その次が終戦をはさむ小諸時代ということになるのです。今日はこの小諸時代をお話しします。小諸時代、詳しくは昭和十九年九月四日から二十二年十月二十五日、足かけ四年です。七十一才から七十四才まで小諸に住んでいたことになりました。小諸では野岸甲三二八八小山栄一の持家に住まれた。一般には与良という方が分りの早い地名です。六畳と八畳の住いで、そこに老先生夫妻と女中さん、荷物も入れたから手狭でありました。小諸での生活は「小諸雑記」に詳しい。仕事は鎌倉にいた時と変わらず、選句だとか、いろいろあった。寒い土地で散歩もできないので、縁側を利用して散歩にかえた。八畳と六畳と合わせたところに三間半の縁側があり、それを行ったり来たりしたのです。ただ行ったり来たりではつまらぬので、時々足を速めたり、又、時々は緩めて歩いたり、冬の日差しがガラス戸からさしこむと、先生の言葉を借りれば、「猫が擦り寄るように」ガラスの方へ寄って歩いたとのこと。それからまた仕事をされる。夜は二間の中、女中さんの寝る部屋の方に炬燵があったため、そこですごすべく、女中に矢田挿雲の「忠臣蔵」、のちにはパールバックの「大地」なども読んで聞かせている。後には手狭なので古い蚕室を隣に引いてきて、仕事場とされている。これは俳小屋とも呼ばれ、句会場になりました。鎌倉に帰られてからも仕事部屋

を俳小屋と言われていました。小諸の家の庭に寒さの中で何も無いのもつまらなしいと思ひ、紅梅を植えようとしたことがあった。ところがなかなかみつからな。ある時懐古園に杖を引いて見るとそこに紅梅が咲いており、我が家になくても、紅梅を探し当てたことに満足を感じておられます。花といえは、梅を好まれ、湯浅桃邑の調べによると、梅の句は、「六百五十」に二十一句、以後の「句日記」に八十数句の多きが数えられるとのこと。虚子の戒名の「虚子庵高吟椿寿居士」も故なしと申せません。然し、先生の愛された梅はむずかしい梅ではなくて、田舎娘のような赤い派手な山椿を好いておられた。小諸には椿がなかった。「寒い山国であるから椿はないのであろうと諦めた」と記してもいます。椿がないので、その渴を懐古園の紅梅で満たしてもいたのでしょう。「紅」「赤」を好む——それは元来有情の作家虚子にふさわしく、また小説「虹」にもつながると思ひます。

小諸に移って間もなくの十九年十月に「十月二十日。虹立つ。虹の橋かかりたらば渡りて鎌倉に行かんといひし三国の愛子におくる」と前書があつて、「浅間かけて虹のたちたる君知るや」、「虹たちて忽ち君の在る如し」、「虹消えて忽ち君の無き如し」という非常にロマンチックな句を作られています。これは、うしろにある事実を知らない人には、恋人同士とも思えるほど艶やかな句です。小説「虹」の名作はこの句を土台にして生れたといつてさしつかえないのだが、七

十一歳の虚子の胸にこのような艶やかなものが、少しも枯れずに、いや、むしろみずみずしく宿ったということは虚子を知る上に大事です。その相手は北陸路の三国港に病む森田愛子です。愛子は二十二年四月一日に亡くなり、分骨されて鎌倉寿福寺の虚子の墓の前に墓があります。山国の蝶を荒しと思はずや

は昭和二十年五月十四日作。「年尾、比古来る」と前書がある。「荒々し」という文章に「小諸というところに来た時の直覚は何となくすべてのもが荒々しいという感じであった。家の建築でも、土地の耕作でも、人の举措でも、また言葉つきでも何処となく荒々しいという感じであった」とあるが、その「荒々し」がこの句の蝶にも言えたのです。眼前のものを一見無難作にとらえ、これを一句にするのは虚子の手法ですが、土地が美事にとらえられている。その他「冬山路俄かにぬくきところあり」「初蝶来何色と問ふ黄と答ふ」「爛々と昼の星見え菌生え」などの名作が数多く、小諸時代に生れ、虚子俳句のピークを形づくっています。私は虚子を情の作家と見ているがその最後の華やきがこの小諸時代でありそれが小説の「虹」となり、いくたの秀作となつたと思うのです。

終戦を迎えたとき「敵といふもの今は無し秋の月」を作っている。この戦争も雲烟とみなしているさりげなさから平畑静塔氏は「俳人格」を説いているが、その虚子の胸の底に燃えている情が小諸時代を形成させたのです。

また、次のような文章があります。

「戦時中も戦後も、東京に帰ると新聞や雑誌の記者は私を擁して、戦争の俳句に及ぼした影響、又戦後の俳句は如何になるかというような質問をした。私は俳句に限ってちっとも変化はない。従来の俳句の道を進んでゆくばかりである」と答えた。記者は皆あきたらぬ顔をして私を見た。中には憐れむごとき目をして私を見るのもあった「ジャーナリストはこういう虚子の答にあきたらなかつただろう。しかし、私は「自らを待む」という力強さを感じています。すなわち自分が唱えた花鳥諷詠の良し悪しは、人の批判にまかせざるが、自らは信じ間違いないとしていることです。その後の虚子は年来の平凡を愛するということをし、さらに事毎に強調して説き、また、「俳句は平俗の詩」「日常の詩」とし、「平俗の人が平俗の大衆に向つての存問が即ち俳句である。」と説いている。

この平俗のみが学ばれて、句が低俗になることは残念で、虚子にあってはその底に小諸時代に見られたような情の高揚が、その後もしずかに持続されていたことを忘れてはなりません。

〈講演要旨〉

文芸雑感

小林 秀雄

俳句第二芸術論が言われた時に、高浜虚子氏が「俳句も芸術の仲間に入れても

らえるのか。第二芸術にしる、ともかく芸術だということになるのはありがたいことだ」という趣旨のことを言つたと聞いています。今日は小説が第一芸術だから、俳句に限らず、私のやっている批評も第二芸術らしいのです。

芭蕉は「余が風雅は夏炉冬扇の如し。衆に逆ひて用ふるころなし」、つまりものの役にたたないものだと言いました。彼も俳諧を経國の事業なりとか、今日いう「第一芸術」だとかいつた考え方はしなかつたと思います。芸術を色々面倒に考へて、文化の創造とか社会の進歩に貢献するとか考へるようになったのは近頃のことです。私がやっている批評でも、文学はこうあるべきだと論じて、誰も従わない。論争しても相手を説得するのはむずかしい。つまりものの役にたたない。それで考へるのだが、批評も文学の一種だが、文学の基本はやはり「夏炉冬扇」です。ものの役にたとうと思ふのなら、他のことをやればいいのです。

たとえば、私が書くものを誰かが読んでくれ、何かを感じてくれればいいので自分の評論がどういふ社会的価値を持つかといったことは考へないのです。私は文学を読んだり、また書いたりするのが若い頃から非常に好きでやっているうちに、世間でいう「評論」というものに当るものが生れてきたのです。好きになつて、漸次深くはいつてゆくというものが根本です。言葉が好きだつた芭蕉も同じことです。

梅原竜三郎氏が秋の展覧会に出品する富士山の絵を、三月から描いている様子

を見たことがあるが、朝日が富士にパツと射すのを描くために、暗い中に起き、外套や襟巻をして、日の出を待つことを毎日続けている。普通の人はこれを大した忍耐と努力だと思ふかもしれないが、ほんとうに好きだから自然と精神集中してしまうので、忍耐とも苦勞とも思つていないのです。人間は意識的に努めても、嫌なことは生理的にも続くものではない。或るものへ強制されてする意識的な注目は、永く続かないが、それが好きな人は、どうしても目が離せないもので、いつまでも凝視している。これは、或る女性が好きになると、いつまでも見守つているのと同じです。だから、嫌なことをやらせる訓練主義は、人間心理を解さないものです。

新奇な映画や小説ばかりを追つかけている人々は、新しい刺激を求めているので、「好き」ということは違ふ。彼らは飽きやすいから、次に新しいものを追つているだけで、真に好きでないから注意力や観察力は育たない。しかし、好きな者は、梅原氏が何年も薔薇を描き続けているように、一つのものがあれば、それで足りる。薔薇を好いて二三年描いていると、細かい注意力や観察力が育つ。第三者には同じ薔薇を毎日見ていると思へるが、当人は毎日違つた美しさを発見しているから、違つた薔薇を見るのと同じことになり得る。

つまり、好きが根底になる、注意力が自然に育ち、新しい発見もできるので、好きだから注意するので、注意するから好きになるのではないのです。私の

仕事は考へることだが、考へることが私は何より好きです。考へたらどういう役にたつかは考へず、ただ考へる、自然に考へてしまふのです。本居宣長が「玉勝間」で、「考へる（かむかえる）」の語の原義を考証して、「むかえる」が語原だと言ふ。「むかえる」の「む」は自分の身のことで、「かえる」は、交わることだ。だから、考へるというのは、ものを迎へてこれと交わることだと言つてゐるが、私も賛成です。考へるとは、ものを計量し分析することではなく、或る対象を、私の身が迎へて交わることです。これはつまり好きになるといふことと同じだと思ひます。孔子も「徳を好むこと色を好むがごとくなる者を見ず、やんぬるかな」とか「これを知る者は、これを好む者にしかず。これを好む者は、これを樂しむ者にしかず」とか言つていま

す。一旦ものが好きになると注意が集中して、だんだんそのものが深く見えてきて、樂しむという境地に入る。ものを樂しむようにならなければ、眞の認識や知識は得られないと、孔子は思つていたのでしよう。このことを、現代では皆おろそかにしています。現代の知識人には好きなものがない。好きなものが一つあれば、それが実を結ぶ仕事の出発点だが、この出発点を、彼らは持たない。要するに、何でもいいが、好きなものをキャッチしなければ、実を結ぶ仕事は成就しないと、この頃よく考へます。

× × ×

徳島まつり

高井北杜

南国阿波の花便りは三月も下旬になると聞えて来て、四月三日の神武天皇祭の頃が満開ときままっている。ところが今年には異例の寒波に見舞われ、中旬には親ゆび大の雹が降り、下旬になっても小雪がちらつくといった具合だから眉山の桜はもちろんお城山の花の蕾もいまはほころびぬままである。

今年で第五回を数える徳島まつりはこの桜の開花と共にいつも四月下旬、十日間ほど全的に多彩に催される。いわば冬が去ってその年の陽気を迎える市民の気持が花の下で爆発するのである。

そんなわけだから季節が遅れているとはいっても祭の準備はすすんでいると朝の新聞を見ると、県下の有名踊り子一〇〇連がくり出す阿波踊りをはじめとして、渦潮撮影会、ミス徳島をモデルとする写真コンクール、さては蜂須賀公入国三八〇年を祝う蜂須賀展、茶会、舞踊会、箏曲大演奏会などかずかずの催しが発表されていた。

だが県外人や暇人ならいざ知らず慣れたものには騒々しさが先に立って沢山の趣向もたいていは知らずに過してしまふ。「まつり」の本命は何といつても「桜狩り」それも眉山の、そして「滝のさくら」ということになるのが通例である。眉山は、びざんだが、「まゆやま」の意。

眉のごと雲井に見ゆる阿波の山
かけて漕ぐ舟とまり知らずも

と、ある万葉集の歌が原拠らしく、海上から見る山の姿は文句のとおり阿波美人の優しい眉にも似てひとすじの霞をまといながら、近代都市徳島の背景をかたづけつつある。

市の表玄関徳島駅を降りて南国情緒ゆたかなワシントン椰子の大路を五〇〇米ほど南下すれば眉山ロープウェーのスマートな駅に突き当たる。ここ天神下から石階を登ってすぐ花見にかかるのもよい。しかしゴンドラに揺られながら三百米の

眉山頂上を極め、その数分の間に眼下の滝のさくらや城山を中心とする市街、さては東洋一を誇る吉野川橋とそのデルタ淡路島などを眺望するのもよろしい。私はその天神下から右折していまも城下町の名残をとどめる寺町の築地や幸院の細道を縫うて大滝山への道をとる。その間に、小泉八雲と並び称せられるポルトガルの文豪モラエスとその愛人小春の墓に詣で、「夕霧伊左衛門」として歌舞伎に浄瑠璃にかたり伝えられる「夕霧」の朽ちゆく碑銘にあわれをもよおし、浮世絵の天才東洲斎写楽の墓所などをたずねて歩くのである。

寺町が尽きるところ山裾に三軒の大きい焼餅茶屋があり、一帯が眉山の中の大滝山といわれる花の名所となっている。私はたいいてい上の茶屋の床几に腰をおろして熱いお茶で焼きたての餅をほうばりながら、ひとすじの清い滝を中心とした左右上一帯に咲きあふれた花をめぐる。



阿波の木偶



阿波おどり

ひと休みしたら古風な土塀と石段に沿って登る。谷々を埋める花かげに芭蕉の句碑や夫婦椋の奇異を見、やがて神武天皇の銅像前広場に出れば、花と人と掛茶屋のにぎわいに桜狩りの行もクライマックスに達するのである。ここから先の天神下までのみちには「花のトンネル」と呼ばれる所もあり、名のとおり花はいよいよ豪華に、茶屋は勢よく市民の鬱憤を発散させて時のたつのも知らない。

昼もよろしい。だが通人は夜ざくらを堪能する。徳島駅からは、別に眉山頂上まで、大滝山までのバスが夜も出ている。去年は花のトンネルのあたりを歩いてみたが、花の近いものは蒼みざし、遠いものは雲にも似て、薄くれないのいちめんの雪洞と市街のネオンに調和し、えも言われぬものであった。

いま暮れてゆく眉山を窓にしながらか、四、五日もすれば灯が入るであろうほんほりの花のみちを想い浮べる。やはり市民には「まつり」が待ち遠しいのである。